

あとがき 北岡冬木

詩人の一生は、少年期と老年前期にその創作欲が高まるのではないか。その二つの時期の間に何があるのかといえば、生物学的繁殖期ということになるろう。

私の詩作は、1965年15歳時千葉の遠浅の海辺の市立緑町中学校から偶々世田谷区にある国立東京学芸大学付属高校に入学して、そのカルチャーギャップに悩んだ2年生の頃に始まった。当時内部入学生のグループに馴染めず、同じ境遇にいた山本富夫君と詩の交換をしたことが初めである。しかし、その芽生えは、千葉市立登戸小 5、6年の田辺学級にあったと思う。田辺嘉二先生は当時30歳前後の澁刺たる教育者であった。当時の公立小学校であるから、様々の階層や能力の児童がークラス60人もでクラスを構成していた。しかし、今時の学級崩壊など無縁で、民主的なクラス会を施行し、学力の優劣を補うクイズ形式の補講や表現力を促す文芸ノートの提出など、木目が細かく児童の才能を巧く引き出す講義や真情溢れる評価法を考案されていた。子供達もみんな仲がよく陰湿な虐めなど皆無で、学力も平均して高かったように覚えている。とくに親友であった古山明夫君(東大の入試がない年に京大理学部に入った天才だがその後は学習塾みたいなことをされて今は教育評論家として著名らしい)が理系のトップだったとしたら私は文系の一翼だったかも知れない。実際このクラスから県立千葉高に12人小生の学大付を加えて13人が当時の難関高校に進学したと聞く。これは田舎の小学校ークラスとしては大変な数なのである。その2年間上代容子さんという相棒とクラス新聞(かもめ、という名で県の何かの展示会で金賞をとったと記憶する)を発行していた私の文章力がこの恩師に高く評価して頂いたことが詩作のきっかけかもしれない。

「蒼い地帯」は1年間の自宅浪人の勉学の合間に書きためたものが主体であり、日本医科大学に入学して、ストライキとロックアウトで授業が無かった期間にデモなどに参加して機動隊に対峙し怖い目に遭い人間いつ死ぬかわからないと思って製本したもので、処女詩集ということになる。

「失速する魚群」は日本医科大学在学中の文芸部所属時に同人誌エリア39に投稿したものが大半である。ここでは、先輩の詩人後藤正紀氏に出会った。またその後著名になった文芸評論家の柄谷行人氏が顧問および大学の英語の教師をしていて、授業中に私語を怒られたことも思い出す。但し、彼は教官でありながら学生のストライキを扇

動し退職されて、法政大の教授に転じ高名な「文芸評論家」になった。

だが、このあと 23, 4歳の多感な頃いろいろ人生の挫折を経験し自分では青春の傑作と思っている数十編の第3詩集を作ったのだが、原稿を紛失してしまったので掲載できないのは残念だ。

その後、当時の過激な学生運動家であり後にドイツや米国で免疫学者になった奇才寒河江光(西沢正義)氏(元平成帝京大学教授)と意気投合して演劇や電子音楽に没頭しソ連公演やらレコード制作(1981年LP版疑似技術—テクノイド)を行なったが、さらに形成外科医になり結婚し息子ができたり本業が多忙になりして暫くは詩作は忘れていた。まさに繁殖期であったのだが、結論としては息子一人しかできなかった。

それが、1993年に本業でシドニーに留学することになって、寒河江光氏に国際便での連詩の遣り取りを提案された。まだ PC でのメールはできない時期であった。その1年間の再開した詩作の一部が「南十字星の都から」であり、帰国してからの連詩が「100連詩ごっこ」である。

さいごに、50代になっての時時書き留めていた小品集と20代に創作した曲付きの詞を混ぜて「懸垂する魚群」を構成したが、53歳時過労から脳の一部をぶち抜かれ長期入院する破目になったときに、再び人間いつ死ぬか分からないと感じ、病室でしたためた詩が半分くらい占めているのであちらこちらに少年期の夢と死の影が垣間見えよう。しかし人間は強いものでその後また過去のそして現在の聖女を詠うほど復活したのも愛嬌であろう。

いずれにせよ本業の定年を区切りに全詩集を纏めたのがこの冊子である。

## 履歴書

きたおか・ふゆき

筆名 北岡冬木

ひやくそく・ひこ

本名 百東比古

## 現職

日本医科大学大学院形成再建再生医学主任教授

日本医科大学附属病院形成外科・美容外科部長

日本医科大学附属病院形成外科・美容外科部長

## 資格

医学博士

日本形成外科学会認定専門医

日本熱傷学会認定専門医

日本顎顔面外科学会専門医

日本創傷外科学会皮膚腫瘍指導専門医

日本褥瘡学会認定師

## 略歴

昭和25年1月15日千葉市に生まれる。

昭和37年千葉市立登戸小学校卒業

昭和40年千葉市立緑町中学校卒業

昭和43年国立東京学芸大学付属高等学校卒業

昭和44年日本医科大学入学

文芸部、表現芸術研究会、バドミントン部を経て演劇部劇団海創設に参加

昭和50年日本医科大学卒業・第60回医師国家試験合格

昭和51年同皮膚科学教室入局

昭和53年同第2病院外科にて一般外科学研修

昭和54年同付属病院形成外科助手

劇団海ソ連公演に同行(音楽担当)

昭和57年日本形成外科学会認定専門医

昭和58年長谷部(旧姓)律と結婚

昭和59年医学博士号取得

長男全人(まこと)誕生

昭和61年同皮膚科学講座講師

平成2年同形成外科学講座助教授

平成4年シドニー大学ローヤルプリンスアルフレッド病院客員教授(1年留学)

平成7年日本医科大学形成外科学講座主任教授・大学院教授兼担

日本医科大学附属病院形成外科部長

平成8年中国第一軍医大学南方医院客座(員)教授

平成11年第23回日本美容外科学会会長

日本形成外科学会関東支部会長

平成12年学校法人日本医科大学国際交流センター長

平成13年第12回日中形成外科学会会長

平成14年日本熱傷学会関東支部会長

平成15年日本医科大学付属病院副院長

平成15年日本マイクロサージャリー学会副理事長

平成15年日本美容医療協会理事長

平成16年中国協和医大名誉客員教授

平成18年第1回癒痕・ケロイド治療研究会発起人

平成20年第17回日本形成外科学会基礎学術集会会長、

中国東莞康華病院名誉客員教授

平成21年第1回 Tokyo Meeting on Perforator and Propeller Flap(TMPPF)主宰(東大形成外科光島教授と共宰)

平成22年 International Scar Meeting in Tokyo 主宰、日本創傷治癒学会会長、国際美容外科学会 (ISAPS) 日本支部代表

平成23年 日本熱傷学会会長、中国広州美菜病院名誉終身教授

平成25年日本医科大学図書館長